

分野 ケーブルテレビ向けあんぜん、あんしん番組制作事業

サービス・事業概要

ケーブルテレビの自主番組の企画から編集までをすべて行える「住民ディレクター」をICT人材として育成し、村のほぼ全世帯で視聴できる「とうほうTV」を開局した。

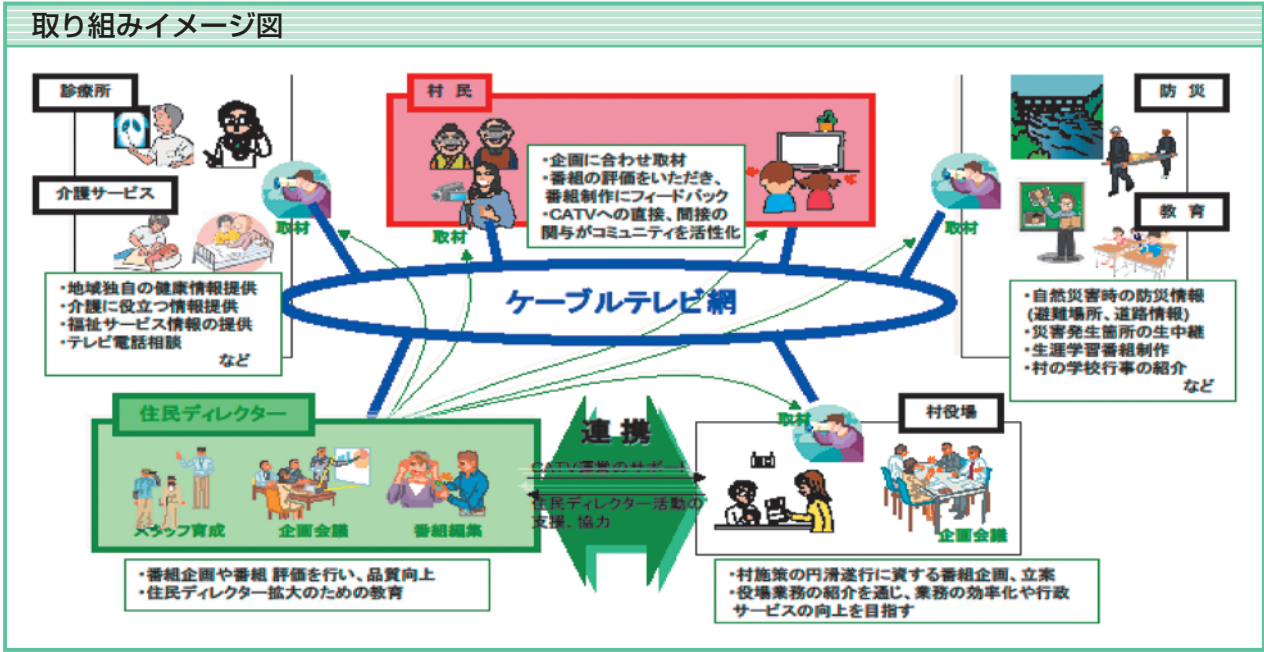
自主番組は、「村民の生活を楽しく豊かにする番組づくり」を目指し、住民の暮らしに直結した福祉・医療・介護、生涯教育などの行政情報と村の歴史や文化を紹介する地域情報で構成されている。特に、地域情報は、合併前の旧宝珠山村と旧小石原村の各集落の交流をはかる意味で積極的な情報発信を行っている。

サービス・事業の背景

東峰村では、ICTによる村の活性化をめざし、平成18年度から慶應義塾大学と連携した「東峰村元気プロジェクト」を進め、住民ディレクター、そんみん塾、鳳雛塾などの住民コミュニティ活動を行い、地域活性化の担い手である住民リーダーが主役となる活動の下地をつくってきた。

平成21年2月には、プロジェクトの3年間で築いた村のネットワークを活用して、地域SNSで集まった投稿動画中継や衛星放送の番組制作で集まったコンテンツを流すなどのメディアカフェをオープンさせるなどのICT関連の事業を継続的に実施してきた。

そうした中で、平成21年度地域情報通信基盤推進交付金事業（総務省）により村営のケーブルテレビを整備し、「東峰村元気プロジェクト」で養成した住民ディレクターを活用しつつ発展させ、さらに多くの住民ディレクターを養成して、全村民が制作・出演に関わるケーブルテレビ局を目指し、「とうほうTV」を開局した。



サービス・事業の成果

- ▶ 80人あまりの住民ディレクターを養成
- ▶ 1時間の番組を11本制作して1週間リピート放送（開局特番は2時間）

実施運営体制

- ▶ 東峰村…ケーブルテレビ施設整備及びテレビ局開設月に1回企画会議（役場内部）により内容決定
 - ※ 地域情報通信基盤整備推進交付金（総務省平成21年度補正）を活用してブロードバンド環境を整備
- ▶ (株)プリズム…番組制作&人材育成を委託

成功要因の整理 (1/2)

行政の特色／役割

▶ デジタルディバイド解消に向け村長自らがアピール

- ✓ 村長自らのアピールにより、国や県、大学と連携して大きな動きを作りだして、村として現在にいたるまで継続してICT関連事業を実施
- ✓ 事業の継続性などにより、住民理解も深まり、人的ネットワークを築くことに成功

▶ 村営によりケーブルテレビ施設を整備し、テレビ局を開設

- ✓ 村営のため加入料金を抑えることができ、ほぼ全世帯がケーブルテレビに加入することによって、地デジ対策や新たな広報媒体としての威力を発揮
- ✓ 行政情報番組においては、職員自らが出演し説明することで、行政情報のオープン化とともに職員の顔が見える行政を実践

▶ 市町村合併による旧2村の市民交流の促進

- ✓ 村民自らがお互いの村の特徴などを紹介することによって、村民主体での交流促進



国、県、大学と連携し、村内外の関係者を巻き込んで施策展開してきたことがポイント！

現状調査・サービス企画プロセス

▶ 2600人、全員で創るテレビ「とうほうTV」

- ✓ 4年前からスタートした「住民ディレクター活動」を軸に、老若男女、各業種、全集落で住民ディレクターを養成し、近い将来2600人全員が参加出演するテレビを目指した

▶ 6つのテーマをわかりやすく

- ✓ 村の新たな広報媒体として、村の暮らしの基本である介護、高齢者見守り、気象・防災、行政、予防医療、生涯教育の6分野のわかりやすい番組化を目指した



これまでの事業との整合を図った上で、発展的に事業を計画したことがポイント！

計画プロセス

▶ 従来の市町村ケーブルテレビの番組制作の課題を参考に計画

- ✓ プロの制作者に全面委託だとコスト面に大きな課題
- ✓ 行政職員数名が専門化すると住民の主体的な参加が難しい

▶ 継続できる仕組みと成長するICT事業の創出

- ✓ 養成した住民ディレクターが自らの空いた時間で無理なく活動できる仕組み作り
- ✓ 住民ディレクター（ICT人材）を生かした新しい事業や産業の創出



過去の事例等を参考にして事業の継続性を意識したことがポイント！

成功要因の整理 (2/2)

開発プロセス

▶ パソコンやビデオカメラなどの機器は汎用的な機材で

- ✓ 独自のシステム開発や専門機材も性能や画質よりも使いやすさを重視
- ✓ 高齢者など機材の扱いに慣れていない村民でも扱える機材を選定



性能や画質にこだわらず、汎用性を重視した機材を使用することがポイント！

運営・評価プロセス

▶ 多くの住民や職員がOJT研修で、実際にケーブルテレビで放送する番組を制作

- ✓ OJTにより、パートナーとして撮影や編集に同行することで、誰でも習得可能な最低限のプロの技術をからだで身につけ、番組としての及第点をとる制作の全プロセスを経験、習得
- ✓ プロの技術を持ったキーマンが東峰村に住むことにより住民との距離が縮まった

▶ 制作した番組を実際に放送することで、自然反応的に住民が評価

- ✓ 個人の趣味的視点では視聴者たる住民の要求には応えられない
- ✓ 住民の声を活かすためには住民自身が制作、発信することが肝要である



プロの技術をもったキーマンが東峰村に住み始めたことがポイント！
住民（ディレクター）が番組を作り、住民が評価するというサイクルが重要！

